Henry James をいかに読むか

——英米両文学史にまたがる巨匠の位置とその文学について——

栃　原　知　雄

I

「Henry James をいかに読むか」について論述してみようとしているのであるが，これは私がいかに読むかということであり，それは又私自身の James 研究の反省を物語るものでもあるという事が出来る。戦後，この巨匠の文学の研究にとりかかった頃，私は James 文学の城壁を鉋で削っているような思いがした。現在，ようやく城門をくだいて本拠に立ち向う段階まで来たように思うので，再び James 文学の本質を見失わない読み方は何であるかを追求し，あわせて自分の研究に対する反省の契機ともしてみたい。

Ezra Pound は James に関して "A Brief Note"[1] を書き，その冒頭に次のように書いている。"Some may say that his work was over, well over, finely completed, and heaven knows there is mass —— a monument of that work, heavy for one man's shoulders to have borne up, labor enough for two lifetimes; still we would have had a few more years of his writing……" James 研究には，James が多作の作家である故に，人は二つの命をもたねばならぬ程であり，又その文学が内容，形式共に取り組み難い性格のもので，殊に英語を母国語としないものにとっては，（おそらく，母国語とするものにとっても）その研究は容易な仕事ではないといえる。このことをよく知りながら James 研究の冒険に乗り出す訳は James の得体の知れぬ魅力によるものであろう。ことわって置かねばならないのは，この巨匠の文学にも勿論，長所と短所をそなえていると思われるので，既に私はその作品論に於て，この事に就いて私なりに論述して来たのであって[2]，「魔術師の魅力」に眩惑されて，少し俗な言葉だが，アバタもエクボとみるような評価に賛同している訳ではないのである。わかりきった事だが，一作家の研究の究極点はその特質を究明する事であって，その短所，欠点のみをクローズ・アップすることでないのは勿論である。私は，この当然の本旨にそむかず論述評価する積りである。

さて，James 文学の研究は当然アメリカ文学の成長（或は伝統）の上に置いて考察しなければならぬと同時に，ヨーロッパ文学殊にイギリス文学との関連に於て考察しなければならない。更に重要な事は，近代文学の動きの中に置いて考察すべき事であると思うのである。James を，ナショナリティの問題を超えて近代文学の動きの中に置いてみることが甚だ大切だと思うのである。戦前，戦後を通じて，Henry James に関する評論は実におびただしい数にのぼる。私の所持しているもの，或は読了したものだけでもかなりの数にのぼる。今回はそのことごとくに言及するのでなくその代表と思われるものをとりあげ論述し，最後に私なりの読み方，私なりの James 文学のつかみ方をしてみることになるであろう[3]。Henry James は大部分の英，米文学史をみればわかるように，その両方に巨匠の名をとどめている。そして，アメリカ人である James が母国を離れ後年（1965年72才の時）英国民に帰化した離国作家として取扱われているのが普通である。そこで，T. S. Eliot の場合と同様，Henry James はアメリカ人として取扱うか，イギリス人として取扱う

か，甚だ常識的な線で問題になり得るのだと思う。このことは，一例をあげると，Randall Stewart[4] が英国の批評家 V. S. Pritchett の New York Times Book Review によせた "Two Great American Puritans" という論文を引合に出して，Pritchett が，Henry James と T. S. Eliot をアメリカ人と主張しているのは心強いと述べていることなどをみてもわかるようである。

私自身は James をアメリカ側に置いてみるとか，イギリス側においてみるとかいう考察ばかりでなくどうしても近代文学の動きの中に於て考察することに興味をもつ。しかし，今，前者の代表に Quentin Anderson[5] と Van Wyck Brooks[6] 後者の代表に Herbert Read[7] と Stephen Spender[8] をとりあげる。そしてこの四人の批評家の論評の中心をかえりみて James の位置とその文学の特質を究明しつつその読み方を考えてみようと思う。これもわかりきった事だが，文学の研究は何よりも作品そのものの研究であり，作品の解釈と鑑賞と理解と評価が第一でなければならぬ。指さす指をみるのでなく指さす月をみるのでなければならない。殊に James の文学の研究はその作品そのものを一つ一つ読みほぐして行かねばならない。James といえども，数多くの作品が，ことごとく傑作である訳はなく凡作もあれば，或る批評家からすれば悪作と思われるものもあろう。作品を読み進む徒労を厭うてはならない[9]。James の作品のいくつかを雑に読み数人の批評家の口吻を借って James 論をこねまわしても James はわからない。James の数多くの作品の不揃いと高低の波動の線の中に対象の真の姿と正しい評価とをつかむことが最も大切だと思うのである。

II

「長い間，アメリカを離れていたためと，又その間の変動から，今になって不思議にも自分の母国アメリカがロマンティクなものとみえるようになって来た。かって私の夢の中で，私がこのヨーロッパにはじめて来た頃『ヨーロッパ』がいつも私にロマンティクであったと同じように。」と Henry James は兄 William に手紙を送っている[10]。この手紙は1903年5月24日付であるから James 60才の時である。いつわらないこの James の述懐は最もだと推察することが出来る。James にとっては，英国（ことにロンドン）は住むために，フランス（ことにパリ）は学ぶために，イタリー（ことにローマ）は愛するためにあったようなものだった。特にロンドンは James を迎え，数週間のうちに，イタリーにもパリにも，見なかった空気に James を包みこんでしまった。かつてアメリカにいた頃から抱いていた理想的なロマンティックな古いイギリスの面影を感じさせてくれた。ロンドンは James になにか血縁的なものさへ感じさせたのである。それでも James の所謂「大きなアングロサクソン的全体」に属する一人として英国に家を構えて40年ばかりに及びながら猶かつ自分を一人の異国人と感じない訳には行かなかったのではないだろうか。第一次世界大戦2年目，なお異国人として監視のめであつかわれるのを気にして1915年英国に帰化するに至るのである。Henry James の生涯と経歴を詳細によみとって行くとやはり James の一生は巡礼と遍歴の生涯であり更に，「心の遍歴」に於ては猶より以上に eventful であったようである。1843年4月15日 New York 市の Washington Place に生れ，1916年2月28日（英国に帰化した翌年，The Order of Merit を授った年）Chelsea で最後の息をひきとる73年間の生涯は云わば，James にとって，James 文学を創造するために生れ，生きぬいたものともいえる。James の文学を創ったのはアメリカでも英国でもましてフランスでもなさそうである。T. S. Eliot も云うように James 程他の影響を受けることの少なかった作家はほかにはないのではなかろうか。James のめで人間を鋭敏に観察して出来上った James の創った文学だと云えぬ事はない。

しかも，それと同時に James 程多読の作家も，また他の多くの作家や文学者から学び取った人もほかに少いであろう[11]。しかし結局 James は James の文学を創り上げたのである。James の読書範囲は甚だ広いから何かを読みとった，何かを学びとった作家の数は多数にのぼるであろう。

いまかりに，そのめぼしいものをあげれば，アメリカ側では，R. W. Emerson, E. A. Poe, C. E. Norton, J. R. Lowell, W. D. Howells, そして特に N. Hawthorne, イギリス側では，J. Austen, W. M. Thackeray, G. Eliot, C. Brontë, G. Meredith, A. Trollope など，ヨーロッパ側では先ずフランスの Honorè de Balzac, Alphone Daudet, Gustave Flanbert, その他フランスのリアリスト達，ドイツでは Johann Wolfgang von Goethe,その他の国の作家では Henrik Ibsen 殊に，ロシアの Ivan Sergeevich Turgenev (Henry James は Turgenev を用いないで Turgenieff の方を採用している）等である。

そして，James は生れて6カ月目からアメリカ大陸とヨーロッパ大陸を数度行ききしている。第1回は1843年から1844年（James 生後6カ月の時）ヨーロッパ各地を両親につれられて歴遊，フランス，英国 (Winsor) に滞在，第2回は1855年から1858年（家族と共に）Geneva, London, Paris そして Bonn と移り住む。第3回1859年（16才の時）ヨーロッパ旅行，James は Geneva, Bonn に於て教育を受ける。第4回1869年から1870年へかけて（26才の時），England, France, Switzerland, Italy を旅行する。第5回1872年（29才の時）妹 Alice と叔母 Katherine Walsh と共にヨーロッパを旅行する。第6回1876年（33才の時），いよいよヨーロッパ永住を決意して France に行く。同年12月居を London に移す。それ以後各地へ旅をする。1877年 Paris 訪問，冬を Rome で過す。1879年 Italy に旅し，Paris で3カ月過す。1880年 Italy へ旅行，1881年 America へ一時帰国，1882年秋 Paris へ行く。その年12月父 Henry James Sr. 永眠のため America 帰国，1884年 Paris, Italy に滞在，1887年 Italy 滞在，1888年 Switzerland, Italy の北部，France を旅して英国に帰る。1890年 Italy を旅行，1892年 Italy で夏を過す。1893年 Paris へ行き Switzerland を旅行する。1896年ライのラム・ハウスを借りる。1899年夏を Italy で過す。1904年久し振りアメリカに帰る。そして1910年病気の兄 William について America を訪れたのが母国の地をふむ最後となったわけである。此の間各地で執筆を続ける。James を文学生活へ導く大きな動因をつくった先輩でもあり，親友でもあった William Dean Howells (1838—1920)[12] がアメリカとアメリカ人を材料として，それを最大限に利用した作品を書いたのに反し，「小説家を活動させるには古い文明が必要であるという考え」（"the idea that it takes an old civilization to set a novelist in motion"）を自明の理として James は自分に関する限り，その作品はヨーロッパに投描しなければならないという確心をもつようになったのも上述のような外遊の結果がヨーロッパ文化へのあこがれを倍加することになったであろうし，又「国際的関連」のテーマ[13] に対して James により興味を持させることになった事は当然であろう。

Ⅲ

James 文学の特徴のように取り上げられるこの「国際的関連」の主題に対して James 自身の倦怠が指摘され第2期の新しい主題に移るもののように文学史的には取扱われる。勿論誤った解釈ではない。James は自分が消化した「国際的関連」のテーマを一応用い尽したと同時に，新しい消化への努力を連続する興味を失い，小説の内容よりも形式（或は技巧）に力を注き込もうとする傾向が第2期（中期）[14] にめだったことも事実である。そして James 生涯の後期においては，母国アメリカがロマンティックにみえ，結局母国への郷愁をたつことが出来ず，後期の作品の中には，未完成の作品「象牙の塔」（"The Ivory Tower', 1917）や数篇の短篇小説（例えば，「楽しい片隅」"The Jolly Corner" 1909.「黒衣のコーネリア」"Crapy Cornelia" 1910.「歴訪」"A Round Visits" 1910 等（後の2篇は James が病気の兄 William をおくって母国の土をふんだ年に書かれたもの）が，アメリカを背景としたり題材としたりして新しい手法で表現されようとしたこと，またこの事は James が好んで描く innocent なアメリカ人がヨーロッパとの反撥の側面を示すことになると解釈し，ひいては，アメリカ文化とヨーロッパ文化の間に一つの評価を立てようとす

る態度と関連して，James 自身がヨーロッパ文化にあこがれ，母国を離れたことは結局無益であったのであり，後年アメリカ文化を再認識するに至ったことは正しい態度で当然であるという考え方がなり立つ。このような解釈をする批評家はアメリカ側に多いであろうが，その代表は Van Wyck Brooks と考えてよかろう。Brooks の著書 "The Pilgrimage of Henry James" (1925) にみる見解である。"The Pilgrimage" From *Days of the Phoenix* (1957)[15] 中にこの主張を裏書するような Brooks 自身の次の評言がある。

"Judging by these later cases, it seems to me disastrous for the novelist to lose his natural connection with an inherited world that is deeply his own, when, ceasing to be 'in the pedigree' of his own country, he is no longer an expression of the communal life."

Brooks に劣らず，James をアメリカ側に置いて考察する批評家に Quentin Anderson がある。その著書の表題のように Henry James を "The American Henry James" (1957)[16] として評論をする。此の書は Lionel Trilling が "Mr. Anderson's book is one of the most brilliant critical works of our time" と激賞したものである。Anderson は James は決して離国作家 (expariate) でなかったという信念をもつもので Anderson の見解は，父 Henry James Senior の強い James への影響（殊に宗教的影響）を考察し，父から受け継いだ精神が James の芸術に条件反射をしているとまで考える。そして James を "a moralist of a particular sort, who emerged from a particular scene" とみる。"Father's Idea"[17] という章では，父の James への哲学的，宗教的影響を詳述する。そして，この章の最後の部分で次のように結んでいる。

"'Father's Idea' had a simple basis, which made possible their ramifications and involutions. What the novelist was from infancy so sure of that he never dreamed of questioning it, was that his father had been quite right about experience. There were two ways of *taking* it, the selfish way and the loving way, and those who took it in the former, accepted conventional forms, while those who took it in the latter, made their own forms, and arrived at a style which was a worthy container of all that was precious and noble. When he found both these modes of appropriating experience at work in his own mind and soul, he began to write and — genius aiding him — became Henry James." 更に，"Manifest Providence" (同書 208 p.) では "*The Ambassadors*, *The Wings of the Dove*, and *The Golden Bowl* contain the clearest, simplest, and most carefully articulated representations of his father's idea to be found in the whole range of Henry James's work." と述べ，

James の小説を "divine nobel" とさえ呼ぶのである。このような意味合からでも James が "expariate" でないとする。そして，Anderson はこのような "divine nobel" はアメリカ的だという論旨に終始するのである。

Ⅳ

前述の二者 (Brooks と Anderson) の見解は賛同するとしないにかかわらずいたって明晰なものであるが，Brooks の見解に真向こうから反対するのは Herbert Read[18] である。さて，ここで，Herbert Read の論旨を考察しよう。Read は，Brooks は Henry James の真の意義を全く誤解し，James の価値の概念を理解することが出来ない，ときめつけるのである。即ち，

「新大陸の処女地から見れば，ヨーロッパは死滅した価値と腐朽した風俗の地と思われるかも知れない。ヨーロッパの文明をみた人は，その文明の走路を走り終って，避けがたい一つの宿命に到着しなければならない文明と考えるかも知れない。このように概括することはたいへん可能であるし，又，今日の流行にもかなったことである。そして，今のところ，それがどれだけ非科学的で

理由のないことに見えようとも，この容易な宿命論に疑念をもつ必要は何もないのである。というのは，なんら歴史的な予言に耳を傾けなくとも，われわれは近代世界の風習や文明が凋落しつつあることをいくらでもみとめることは出来るからである。」

"You may, from the virgin soil of a new continent, look upon Europe as a land of dead values and decaying manners; you may think of our civilization as one that has run its course and must inevitably complete a fatal destiny. It is very possible to generalize in such a manner, and it is very fashionable. And there is no need, for the moment, to throw doubt on this facile fatalism, however, unscientific and unreasonable it may appear to be. For without involving ourselves in any historical prophecies, we can freely admit the decay of manners and civilization in the modern world."[19] と述べている。

そして，Readは，この実相を Henry James 程鋭敏に，誰にも劣らず認識した人が他にあるだろうかという。しかも，「憐みつつこの衰退を暴露すること」"the pitiful unmasking of this decay" に James は自分の使命を見出し，同時に，その社会の構成の内部にわずかにひそんでいる「物静かな本質的な美質」"a few quiet, essential virtues" を再認識することを自分の使命と考えたと解釈するのである。そして，こうした美質は，物静かで，無限に個性的 ("infinitely individual") でそして寡黙で ("reticent") であるのである。James の後期の代表作 "The Ambassadors" (1903) 中の人物 Lambert Strether の意識の中に二つの文化の衝突があり，更に厳密に云えば，それが文化と野蛮の対立として示されるのである。しかし，注意しなければならぬことは，James は文化を簡単に反対の二極端に分けて事終れりというような粗暴な考察をしないから，アメリカの野蛮性を James の所謂「田舎くささ」("provincialism") として文化の圏内の一態度とみようとしていることである。Read は，こうした James の普遍的な文化の観念を次のように述べるのである。

「文明は Henry James にとっては，完全に明確な歴史的現象を意味していた。それは一般的に云えば，西欧が古代世界から継承した連続的な文化の伝統を意味し，更に詳細に云えば，今日，猶どれだけ稀薄な低劣な状態であっても，われわれがその中に生存しているルネッサンスの伝統を意味していたのである。」

"Civilization for Henry James meant a perfectly definite historical phenomenon: it meant in general the continuous tradition of culture which Western Europe inherited from the ancient world: it meant more particularly the Renaissance tradition in which we still exist, in however attenuated and debased a fashion."[20]

更に，このような伝統は James にとっては個個の文明的物件によって伝達されるようなものではなく，本能 ("instinct") ないしは，遺伝 ("inheritance") によって得られる一層精神的な「洗練の状態」"a state of refinement" であったのである。従って，Read は，文化にたいする James のみかたを次のように解明するのである。

「文明は James のみるところによれば，絶えず増進する複雑さの現象であり，この複雑さを理解し発達させるために必要な努力を拒否することは英知の生活そのものを拒否することであった。」

"Civilization was in his view a phenomenon of ever-increasing complexity, and to refuse the effort required to comprehend and develop this complexity was to deny the life of intelligence itself."[21]

このような拒否の例として，Read は James が去った America と James に Tolstoy と Dostoevski をつきつけた Russia をみていたと云うのである。そして，Read の James 論にはアメリカ文化に対するヨーロッパ文化の優越性が認められるのである。Read の解釈によれば，James がアメリカをすててヨーロッパに就いたことは無知な行動でもないし，又勿論，精神的な堕落でも

ないと断定するのである。そして，Read は今日われわれが文芸の世界から主要な二人の対立する代表者として，Dostoevski と James をあげ，James には時代の集中された力を，そのもっとも永遠的な栄光のあかしにまで秩序づける，平静な，支配的な，寡黙な，そして潔癖な知性があると論を結ぶのである。

従って，Read によれば Henry James の一生は Brooksの見解のように，巡礼 (pilgrimage) のさすらいではなく，落ちつくべき伝統の栄光の中に落ちついた完成の道筋であったわけである。

V

James の生涯は Brooks の見解のように巡礼のさすらいでなく（たとえ，それが巡礼のさすらいであったとしても）その落ちつくべき伝統の栄光の中にその文学的完成の道をたどった訳で，このように，James を「歴史的現象」としてヨーロッパ文化の伝統に置いてみることは，云わば，アメリカ対ヨーロッパの関連を離れて近代文化の展開の中に James の位置を考えることになる。近代文学として，James は一部には非常な愛好者をもちながら，その特異性——繊細複雑な心理と手法——をもった大量の作品と精緻あくなき多量の評論をもって，又 W. S. Maugham の所謂「羊の角のようにねじまがった文体」をもって，一つの取扱い難い何か神秘的な存在として，一般読者に敬遠されたことは否定できない。第二次大戦後 James の全集の再版，或は James 及び James 文学に関する多くの評論をみて来た今日に於てさえ，この事は云い得るように私は思う。こう考えて来ると1936年既にStephen Spenderが，James を近代文学の発展に，積極的な，しかも，未来的な関連と影響をもつ James 文学の重要性を認識した評論を "The Destructive Element"[22] 中に明晰に書き上げて，James 文学の重要性を認めていることは実に意義深いことと云わねばならない。ここで，Stephen Spender の James の見解を取り上げねばならない段階に来たようである。近代文学の発達は，広い意味に於て，政治的道徳的問題への関心の深化にあるので，James がこの発達の過程にあって，W. B. Yeats, T. S. Eliot, D. H. Lawrence らの重大な先達をなすものと Spender は定めてから，現代の不安の中に於て，その「破壊的なもの」の中にあえて没入して行って，猶かつ，自己の個人的信念を専ら表現することに努めた James の文学の重要さに着眼するのである。それは積極的な或は実践的な信念の表白ではないようにみえても，又，極めて個人的な James の甚だ難解な作品内容も，その底辺に於ては単に主観的ではないので，そこには社会性をそなえているものであることを Spender は主張する。問題は単純ではないのでピュリタン的道徳感或は道徳的信条を James はどうして自分の考えるヨーロッパの伝統の理念に融和させるかの努力を生涯続けたのである。只，この偏執が James の文学作品の世界を限定して James のもつ道徳観 (morality) の実体を不明瞭にさせたのである。けれども，Spender によれば，このような現象は表面的なものであって，James の個人主義の信念からくる儀礼の一部に過ぎないものであり，一見根本的に矛盾する重要な確信と連らなるものなのである。James は，しばしば，自分は何ら政治的な意見をもたないものであると主張するけれども，実際には James の作品には消極的な政治的意見に満ちていると Spender は云うのである。しかも，James は自分の書くような社会を生かすようなシステムを賞讃することによってそれを表現する。("James repeatedly insisted, in all sincerity, that he had no political opinion. But actually his writings are full of negative opinion, expressed in his admiration of a system that keeps the kind of society which he writes about, alive."[23])

James は，しかし，個人主義者であったので美的に道徳的に生きる私的な倫理を編み出したが当時の政治的，経済的腐敗に対する叛逆者であったし，又，フィリステイニズム (philistinism) に対する芸術の闘士でもあった。そして，James は個人主義の圏内にとじこもりながら，現代の世相については極めて強烈に批判を加えていると Spender は考察する。ヨーロッパ小説の現実主義的な伝統によって，アングロサクソンの社会を描破

しようとした。現代の腐敗せる富の巨大な蓄積者達がその描破の対照であり，金銭と愛慾の緻密な構図を描き出そうとしたことは James の作品の読者にはわかる筈である。一口に云えば Spender の云うように James は，政治的，道徳的芸術家（"a political moral artist"）なのである。結局，Spender の James 論にあっては，James はピュリタン的なニュー・イングランド人として，そのアメリカ的なものをヨーロッパ的なものと融合することに苦しんだと考えられるけれども，James がヨーロッパ文化に就いた事は，失敗でも堕落でもないと云うことになる。又，James の問題になる後期の作品でさえ，初期の自然主義的な作品に比較して，創作の手段は想像的であっても，心理的にはかえって，現代の現実に忠実なものと Spender は解するのである。従って，James の最後のリアリスティック転向の動きも，決して James が悔をもって始に還ったのではなく，更に，総合的な新段階へ進行する必然の展開とみることになるのである。

VI

四人の批評家の James 観と，James 論の主張を一応みて来たが，いよいよ私の見解をまとめる順序となった。James の素質をロマンティシズムとリアリズムの二傾向を含んでいるものと安易に解釈してしまえば事は簡単であり，こういう見方は一つの常識ででもあろうが，この二元的素質の相剋の間に，James 文学の成長を辿ろうとす見方は，いたって常識的な単純さを免れないであろうと思う。James のリアリズムは Flaubert を旗頭とするフランスのリアリスト達との接触と，その文学の影響（主に技巧の問題）をとどめて James 文学に重要な作用を続けたことは指摘できるけれども[24]，James 文学の本質（或は特質）をみきわめる重要点の一つは，このリアリズムが常にロマンティックであり，又アーテイスティックである事であろう。例えば James の作品（殊に初期の作品）のどれを読んでみても常に，どこかに詩的な潤いを発見することの出来るのは James 読者の知るところであろう。後期の「想像的」(imaginative) な作品になると，そのロマンティックな傾向は James の主観性のうちに吸収されるのである。そして一方リアリズム的傾向は主観的な世界の完成のために，外部的現実の線上に接合しようとする。Brooks と Read の相反する二つの解釈は，立場がちがっているけれども，各々それぞれ誤った解釈ではない。James の二面性の融合をみないで，各々一面をのみ強調し過ぎているといえるのである。従って，James 文学の本質は常にこの二つの傾向を密接に融合しているものだという解釈を私はとるのである。しかも，このような二傾向の相互関係と総合の上に所謂 James の芸術主義の特性があるという考え方を私はとるのである。そして，この「芸術主義」という言葉を James 文学に関連させて考察する時には，大事に，注意深く使用しなければならぬと思うのである。James にとって「人生」で崇拝するものは「芸術」であり，「芸術」で崇拝するものは「人生」であったので，James は一生を通じて「美」の追求者であったのである。James が一生追求した芸術主義というのは，芸術としての営みの悦びであり，そして，そのうちに於ける生活であった。けれども，この「芸術のための芸術」ともいえる「芸術主義」は既に私は各所で論じた[25]ように世紀末の唯美主義者の「芸術主義」とはちがっているし（"The Author of Betraffio" (1885) 前後の James には多少の唯美派の影響はなかったとはいえないけれども，）又，当時の唯美主義者のたどった人生なるものは，James には何一つなかった。世紀末の唯美派から James を引きはなしたものは，James のもつリアリズム的な本質の力であり，そしてその本質の線に連って活動した「インテリジェンス」の近代性によるものである。例えば，それは "The Portrait of a Lady" を読んでみても "The Spoils of Poynton" を読んでみてもわかる筈である。文学に関しては，James はただ構成のみが積極的な点であると信じ，その上での美の追求者であったといえるのである。James のリアリズムなるものも，何よりも感覚性をもつ人生の vision を新鮮に表現することを求めるもので，そこに瑞瑞しく感じられる生命の豊潤さによって，そのテーマの内的な morality まで露出しようとするよ

うにみえる。それだから作品の世界には一つの真実な人生の vision が浮び，そしてそのモラルが提示されるのである。その時，美の流れと真の流れが合流する。その流れは一つの神秘主義的な流れとさえみえるかも知れない。James の作品を読んで，何か神秘主義的なものに接すると感じるならば，この芸術性によるものではないだろうか。James の文学作品の本質には，それ故に，道徳的センスと芸術的センスの接合があることをわれわれはみるし，又，作品の本質と作家の精神は一つであるとする真理に拠って立つ作家的態度をみい出すのだと思う。こうした見方から James の作品を読むと James の「不明確さ」或は「あいまいさ」(ambiguity) も，神秘性も，又その寓意性も，又，時に，道徳的な余りに道徳的だと思われる態度を持してゆずらない作中人物の動きにも同感出来るのではないだろうか。道徳的センスと芸術的センスの近接は James の一つの大きな特質ともいえる。James は，「芸術 (art) と道徳 (morality) との二者は全く異ったもので，芸術が道徳と関係がないのは，天文学 (astronomy) や発生学 (embryology) が道徳と関係がないのと同じだ」という信条とは根本的に相いれない態度と精神をもっていたといえる。小説の作家であり，同時に鋭敏なその批評家でもあった James がこの作家の心がまえを自ら小説論，"The Art of Fiction" 中に論じているのを知る人は少くないであろう。作家のインテリジェンスが清純であればある程，その作品は善と真の実質をそなえるものである。そして，Brooks や殊に Anderson の James 観にみる James のピュリタン的な又宗教的な一面が，James 文学の真の背後をささえていることもみのがしてはならぬと思うのであって，構成される作品の美，そして，James 文学の読者が一様に感じる難解な作品から James の魅力を見出し，感じとるためには James の手法の洗練 (refinement) を感じとるに足るインテリジェンスを養わねばならぬと思うのである。James による小説の手法（それは，合せて，James の今世紀の作家達への示唆と影響）をみのがさない読み方が必要であり，前述の四人の批評家を基盤として猶こういう意味に於ける芸術家としての James 研究に，又，James の文学作品そのものの内容と形式から，立体的な James の作品から，James 文学の深所をほりあてる読み方と研究を進めるべきだと私は思うのである。 (1964. 3. 8)

註 1) "Henry James — A Collection of Critical Essays" Edited by Leon Edel. 1963. Prentice-Hall, Inc. P. 27.

2) 〔拙稿(1)〕 Henry James 作 "Turn of the Screw" の研究—所謂 "Hallucination" Theory をめぐって—（関西学院大学「英米文学」 Vol. II, No. 1.)

〔拙稿(2)〕 劇作家としての Henry James — "Guy Domville" を中心として（「英米文学」Vol. II, No. 2.)

〔拙稿(3)〕 Henry James 1890—95—劇作家時代（関西大学英文学会「英学」Vol. I, No. 5.)

〔拙稿(4)〕 文学における影響の問題—Henry James の場合（「英米文学」 Vol. IV, No. 1.)

〔拙稿(5)〕 「アメリカ人」をどのように讓むか—初期 H. James のロマン主義と清教主義（関西学院大学「論攷」第7号)

〔拙稿(6)〕 心理小説の三つの型（関西学院大学「社会学部紀要」創刊号)

〔拙稿(7)〕 Henry James 1843 — 1881 — James（前期）の生涯と作風—（「社会学部紀要」第3号)

〔拙稿(8)〕 Henry James 国際テーマ小説の問題点—1871—1881年間の作品と作風（「論攷」第8号)

〔拙稿(9)〕 Henry James Mary (Minny) Temple — H. James の生涯と作風—（「英米文学」Vol. VI, No. 1.)

〔拙稿(10)〕 社会喜劇の悲喜劇的人物—H. James 作「アメリカ人」と F. S. Fitzgerald 作（「偉大なるギャッビー」の主人公について—（「社会学部紀要」第5号)

〔拙稿(11)〕 Henry James 作 "Watch and Ward" 論—この作品の性格と sexuality の問題—（「論攷」第9号)

〔拙稿(12)〕 Henry James : "The Spoils of Poynton" 論—人生と芸術・いかに生きるか—（「社会学部紀要」第7号)

〔拙稿(13)〕 ヘンリイ・ジェイムズと宗教—文学作品にあらわれる「宗教意識」と「悪」の問題について—（関西学院大学「論攷」第10号)

〔拙稿(14)〕 宗教と文学—ヘンリイ・ジェイムズ

の文学にあらわれる宗教意識—（基督教文化学会年報〔No. 11〕

3) 戦前，戦後に於ける Henry James に関する評論書で教示を受けたものは多かったが，特に Leon Edel 教授著の "The Untried Years" "The Conqest of London" "The Middle Years" その他 Henry James の諸作品につけられた同教授の Introduction から教えられるところが多かった。

4) "American Literature and Christian Doctrine" by Randall Stewart, 1958. Louisiana State University Press.

5) "The American Henry James" by Quentine Anderson. 1957. Rutgers University Press.

6) "The Pilgrimage of Henry James." by Van Wyck Brooks. 1928.

7) "Thə Nature of Literature" by Herbert Read. Grove Press, Inc. New York. Published in England as "Collected Essays in Literary Criticism." PP. 354—368.

8) "The Destructive Element" by Stephen Spender. 1935. Jonathan Cape.

9) Henry James には長篇21篇，中・短篇小説110余篇，その他評論（作家論，小説論，自序，文明批評）覚書，旅行記，印象記，書簡集等。

10) "The Letter of Henry James," 2 vols, Edited by Percy Lubbock. 1920. London Macmillan.

11) 〔拙稿(4)〕

12) William Dean Howells の評論集に於ける James の批評は James に対して好意を持つことが大きい。

13) 〔拙稿(5)〕〔拙稿(7)〕〔拙稿(8)〕

14) 筆者は便宗上，第1期〔習作時代から "A Portrait of a Lady" まで，1865—1881年〕第2期〔1882—1895年〕第3期〔1896—1900年〕そして〔1901—1916年〕を後期と名付けて置く。

15) 〔註(1)〕と同書。P. 62.

16) 〔註(5)〕と同書。

17) 〔註(5)〕と同書。P. 82.

18) 〔註(7)〕と同書，同頁。

19) 〔註(18)〕と同じ。

20) 〔註(18)〕と同じ。

21) 〔註(18)〕と同じ。

22) 〔註(8)〕と同書，PP. 23—110. PP. 189—200.

23) 〔註(8)〕と同書，P. 198.

24) 〔拙稿(4)〕〔拙稿(5)〕〔拙稿(7)〕

25) 〔拙稿(4)〕〔拙稿(7)〕

追加．「Henry James をいかに読むか」について，他の二つの小論を発表した。一つは「ジェイムズ文学における題材と手法の問題——T. S. エリオットのジェイムズ論と関連して——」（関西学院大学「論攷」1964年関西学院創立75周年記念号，昭和39年9月28日発行）。他の一つは「HenryJames とその批評家たち—— James 文学をいかに読むか——」（関西学院大学「英米文学」昭和39年11月発行予定）。